
白い部屋

勝智ひらのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い部屋

【Nコード】

N0124I

【作者名】

勝智ひらのぶ

【あらすじ】

男は暗い闇の中をさ迷う悪夢を見た後、狭い白い部屋で目が覚めた。窓も何も無い白い部屋。唯一の手掛かりは壁に書かれた謎の暗号。崩れていく精神。この部屋はなんなのか？男は何故、ここに閉じ込められたのか？閉じ込めたのは誰なのか・・・？

プロローグ（前書き）

閉所恐怖症の人には怖い内容かもしれませんが。

ホラーかつミステリーも含んでいるので、自分も

主人公と同じ立場になった気分で読んでいただけたら幸いです。

プロローグ

悪夢だ。

上も下も、右も左も無い闇、闇、闇……。

自分の呼吸する音が聞こえる。

あとは地獄のような恐ろしい静寂だけが俺を追いつめる。

小さい頃から暗闇は嫌いだった。

あの何もない空虚感……そして暗闇がもたらす静寂。

それが俺にはとても耐えがたいものだっただ。

今、俺はその真っ只中にいる。身体だけが倒れていく気がする。

俺は何所にいるんだ。

出口は、外は、光は何所なんだ。

俺は死に物狂いで手を動かした……何か、硬いものに触れた。

それが何であろうと構わずに押した。

眼が眩む。眼球の奥に激痛が入り込んでくる。

暗闇だった場所は、一気に反転した世界となった。

白。

壁、床、全てが白一色である事に気づくのは目の眩みがおさまった後だ。

ここは部屋のようなのだが、窓も何も無い。

あるのは電球と——……壁の端に何かが書かれている。

俺がフラフラしながら近づくとそれは赤いペンで書かれていた。

いや、もしかしたらそれは血かもしれない。だがそう思いたくない。

「1345Y:E7H……3Y13@4……?」

俺はゆっくりとパスワードのような文字を読み上げた。
全く何だか分からない。

俺が茫然としていると壁についていた手に違和感を感じた。指でなぞると、壁に隙間があった。扉のように線があった。そう、動転していてよく見ていなかったが、それは扉だった。俺はすぐに扉を叩いた。

「誰か、誰か助けてくれっ!!」

例えこれが夢だとしてもそう叫ばずにはいられなかった。声がつるさいほどに部屋に響く。

「ここから出してくれ!誰か!!」

返事はこない。

扉もびくともしなかった。

扉を叩く俺の手は青い痣になっていた。

息苦しい気持ちと手の痛みが俺の脳を刺激する。

そしてこれが現実であるという、酷く残酷な真実が俺を貫いた。

俺はそのまま膝をつき、床を見つめた。

何処を見つめても白だけしか眼に入ってこない。

吐き気がする。手が震える。

勝手に頬をつたって床に落ちた透明の涙は白くなる。

疑問は俺の頭の中を回る。

俺は何所にいる。ここは何なんだ。どうしてここにいます。目的は理由は。

その疑問に答える者はいない。

暗闇が嫌いな俺が、明るい白い閉ざされた空間で苦しんでいる。

暗闇の方が良いのか、この白い空間で良いのかはもう分からない。ただ、ここを出たい。

悪夢なら覚めて欲しい。早くこの恐怖が終わってほしい。
ただ、それだけだ。

何時間経ったのだろうか。

時の変化が見えないこの部屋では、何も分からない。

そういえば、こんな話を聞いた。

一人の人間が一つの部屋でどのくらい過ごせるかという実験をした。
その部屋は時計もテレビもパソコンも無く、外の情報を知る手段は
一切ない。

決められたスケジュールにそって同じ事を毎日続ける。

誰とも話せずに、出来る事も何も無い。

そんな生活を一週間続ければ、高い報酬を受け取れる。

だが・・・その人は三日で実験を中止したらしい。

人間が狭い部屋で独りでいるのは恐ろしく苦しく、とてつもなく恐怖
を感じるという。

たとえ閉所恐怖症でなくてもだ。

ああ、思えば自分も同じ境遇だ。

いやむしろ酷い。何も無いのだから。

・・・食事も？

俺は顔を真っ青にした。

血流が一気にざわめくのをはつきり感じた。

そう、食糧。

食べ物や水は？どこにある？

急に胃がキリキリと痛みだし、不安が俺を襲う。

落ち着け。落ち着くんだ。

この場所は明らかに誰かによって何らかの目的で造られた部屋。

なら、俺を監視している可能性もある。

つまりこの部屋の外に人がいる可能性もある・・・。
叫べば聞こえるはずだ。

俺をこんな場所で飢え死にさせても意味がない。

目的があるなら殺さずに食糧ぐらい与えてくれるのではないか？

俺はゆっくりと立つと例の扉の前に立った。

「おいっ！聞こえてるんだろ！！」

相変わらず返事はないが、話続けてみる。

「何者か知らないが、ここから出せ！身代金目当てか？悪い冗談のつもりか？」

俺は力強く扉を蹴った。

黒い皮靴の表面がすれて、黒く壁に残る。

「答える！ここに閉じ込めた理由は何だ！？ここから出せ！！」

何度も何度も扉を叩きながら喚いたが、何も状況は変わらなかった。
ただ足のつま先を痛め、体力を消費してしまっただけだった。

「くそっ・・・」

俺は息をきらして壁に寄り掛かった。

俺は永遠にこのままなのだろうか？

この白い部屋に、この白い部屋と同じように白い骨になって死ぬのか？

俺は膝をついたまま意識を宙に浮かせた。

そういえばもうすぐカオリの誕生日だったっけ。

口喧嘩ばかりで誕生日なんて忘れてたな・・・。

もうずっと会ってないし、俺の事なんか忘れたいと思ってるだろう。

カオリが俺を見つけてくれれば・・・。

いや・・・見つけてくれるはずないか。

もし俺が閉じ込められていなくても、どーせ仕事に没頭してて仲直りなんてする事は無いだろう。

そう、喧嘩の原因はいつも俺だ。

俺がカオリと向き合わずにパソコンとばかり向き合って・・・。

俺はふと壁に書かれていた謎の暗号を見た。

「・・・」

俺は頭をフル回転させた。

どうしてこんな事に気づかなかったのか。こんな単純な事に。

「これ・・・パソコンのキーボードか・・・？」

1 3 4 5 Y : E 7 H 3 Y 1 3 @ 4。

その暗号を見つめながらキーボードを頭に浮かべる。

これは・・・恐らく、ひらがな表示の暗号だ。

「ぬあうえんけ・・・いやく・・・あんぬあう・・・？」

駄目だ。

筋が通らない。

やっぱり違う暗号なのか？

ひたすら字を見つめて、俺は黙りこむ。

この暗号に何か違和感を感じる・・・。何か・・・。

俺は息を止めた。

もしかしたら・・・。

俺はもう一度暗号を読みなおした。

筋が・・・通った。

この暗号の13は数字の13ではなく、アルファベットのBだったのだ。

「こうえんけいやくあんごう・・・公園・・・契約案・・・号・・・
いや、暗号か？」

幾つか浮かび上がった単語。

公園、契約、暗号・・・。

分からない。これが何の暗号なのか。

暗号が分かったからといってここから出られない状況は変わらなかった。

「くそっ！」

俺は壁を叩いて再び座り込んだ。

狂ってしまいそうだ。

いや、むしろ狂ってしまった方が楽なのかもしれない。

不安ばかりが頭をよぎり、動悸が止まらない。

俺はこのまま、この白い地獄で死んで行くのか。

俺が想像していた地獄は暗い闇の底だ。

地獄が白いなんて誰も思わないだろう・・・。

——何か聞こえた。

一定のリズムで静かに叩く音。

まるで・・・そう、モース信号のような・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0124i/>

白い部屋

2010年10月10日01時56分発行